『比較日本文化学研究』第 10 号（2017）

論　文

中村正直における「良妻」像

郭　　妍 琦
広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Masanao Nakamura's Image of the "Good Wife"

GUO Yanqi

Abstract: The idea of "good wife, wise mother" was one of the most important principles of the Meiji period. It is generally accepted that this concept was put forth by Masanao Nakamura. Nakamura's concept was composed of "good wife" and "wise mother." However, Nakamura's image of the "good wife" has not yet been a main subject of research of his concept of "good wife, wise mother." By analyzing his writings, this article aims to discuss this understanding of the image, the expectations that fell upon women in order to be good wives, and the difference between Nakamura's image of the "good wife" and the image of wives in early modern period.
Keywords: Masanao Nakamura, the image of wife, "good wife"

1　はじめに

明治政府は極めて早い段階から女性を啓蒙の対象とし、新国家を担う人物養成のために女性を教育する必要性を主張して、それゆえ学制が男女に適用された。1900 年代に入ると、「良妻賢母」が女子教育の目指すモデルとして定着した（早川紀代・李熒娘・江上幸子 2007：6）。それはさらに、女性が子供を出産、養育、教育することに重点を置き「母」の役割を偏重する「母性的良妻賢母主義」とでも呼ぶべきものへと変容し、戦前の女子教育における一貫した主軸となったとされる（蔵澄祐子 2008：49）。

この「良妻賢母」思想の創案者としてよく取り上げられるのが中村正直[1]である[2]。中村は 1875 年に『明六雑誌』において「善良なる母を造る説」を掲載して、「良妻賢母」思想を公に打ち出した。近代啓蒙思想家、教育家、更に帝国六大教育家に数えられた中村正直の「良妻賢母」[3]思想は、それ以後の日

本近代女子教育において重要な位置を占めることになった。

中村の「良妻賢母」思想は「良妻」と「賢母」から成立っている。しかし、中村における「良妻」像はいまだ彼の「良妻賢母」思想研究の主な研究対象となっていない。そこで、本論では、彼が想定した「良妻」はどのようなイメージであるのか、さらにそれによって女性がどのようなことを要求をされたのか、そして近世の妻像との違いを中村自身の著作の分析を通じて検討する。これによって、日本の近代的妻像および近代女子啓蒙教育の展開を知る手がかりを得ることが本論の目的である。

2　先行研究

「良妻賢母」という女性像については、それが伝統的なものなのか、近代的なものなのかという議論がこれまでなされてきた。まず「良妻賢母」思想と儒教的、伝統的な女性規範とのつながりを強調する研究者として中嶌邦が挙げられる。明治啓蒙期に西欧の影響を受け近代的な意味での「良妻賢母」教育が登場したが、明治10年代に儒教的見地に立つ学者らの発言力が強まると、明治20年代に保守化の傾向の中で復古的な女子教育観が広がり、明治30年代以降に体制化された「良妻賢母」主義が定着したと中嶌は説明する（中嶌邦 1981：28）。

これに対して、「良妻賢母」思想を近代的な女性像であると主張するのが小山静子と陳姃湲である。小山は、男女の関係性の捉え方や女性の果たすべき役割は前近代から一般的変化を見せており、何よりも、近代の「良妻賢母」教育の目標が、「家」を支える女性の育成と国家の一員としての女性の育成となったいう点で、儒教的な女性像とは全く異なっていたと論じる（小山静子 1991：246-247）。また陳は、「良妻賢母」は儒教経典の説く「良妻」と「賢母」の単純な合成語ではなく、むしろそのような伝統的女性像を批判し克服する意味を帯びた、新しい女性像だったと説明している（陳姃湲 2006:23）。

更に陳は、西洋の影響を受けた明治初期の啓蒙家らの「良妻賢母」思想からは、西洋文明社会への憧憬が読み取れると主張した（陳姃湲 2006：23）。日本初の近代教育制度の中で定められた「賢母の育成」という女子教育の目標は、近代西洋思想を積極的に受容した啓蒙思想家らの女性論が反映されたものだった。明治初期の啓蒙思想家たちは家庭における女性の役割、特に子女の教育が国家の盛衰に直接つながるという共通認識を持っていたが、ここ

には近代西洋思想からの色濃い影響と同時に、西洋の文明社会に対する強い羨望が内包されていたと陳は説明している（陳姃湲 2006：29）。

一方、関口すみ子は、日本の「良妻賢母」思想は、「女範」という古い中国思想と当時の西洋思想が合体したものであると主張した。関口によると、中村の「良妻賢母」思想は近代に入って形成されたものであるが、幕末には既に「賢婦賢母論」なるものがあった。これは「女範」という中国思想がこの頃に本格的に受容されたもので、中村がそれにさらにスマイルズ等の西洋思想をブレンドして、日本的な「賢母」及び「女子教育」思想を形成した（関口すみ子 2001:35）とされる。しかし、中村における「良妻」像は言及されていないと指摘する。

中村正直の「良妻賢母」思想については、明治期の他の知識人と異なり、画期的で積極的な意味があるとの主張もある。小川澄江は、中村も他の啓蒙知識人たちと同様に女性の職分は男子と異なると考えていたが、彼は妻も夫も同等の教育を受けて知識を身につけ、夫と対等に一個の人格として自立すべきだと説いたと指摘し、他の知識人たちとの相違を強調する。そしてこのような中村の認識は、妻の人格や権利を全く無視した数百年に及ぶ封建的な倫理がまだ根強く残存していた当時において画期的であったと結論づけている（小川澄江 2004:325）。また陳姃湲は「明治啓蒙期に中村が女子教育の理想として賞揚した「良妻賢母」は封建時代に閉じ込められた女性たちを新しい時代へと引き込んだ」（陳姃湲 2006：74）と、積極的な意味づけを行っている。

関口礼子は、1895年から1898年の高等女学校の教育目標は「良妻賢母」という四文字に収斂されていたが、この「賢母」と「良妻」の組み合わせは、初期において「母」の役割を重視した「賢母良妻」であり、「良妻賢母」はその後に優勢になったと指摘した。さらに、中村の「良妻賢母」思想の意図は「母」にあり、「良妻」は単に「賢母」に付隋していたにすぎないと指摘した（関口礼子 1978:85）。もっとも関口は中村の「良妻」像については論じておらず、「良妻」がどのように「賢母」に付隋するようになったかも言及していない。

「良妻賢母」思想に基づく女子教育を、女子の知識、教養水準を向上させるのみならず、国民全体の資質の底上げに役立つと高く評価するのが李卓である（李卓 2007：5-7）。これに対し小山静子は、「良妻賢母」という教育目標

が女性にとって両刃の剣であると指摘している。「良妻賢母」は女子教育振興の論拠として使われ女子教育の普及を促す一方で、社会的状況の変化に応じて「良妻賢母」思想は女性の生き方を容易に妻や母の役割に縛り、教育レベルを低度に抑える機能を果たしたと小山は説明する（小山静子 1991:239）。

このように、中村の「良妻賢母」思想と女子教育観に対しては、現在まで肯定的な評価も否定的な見解も存在する。しかし先行研究の最大の問題点は、中村における「良妻」像の検討がほとんどないことである。そこで本論文では、幕末期に女性道徳規範の代表とされた『女四書』の一つである「女範」[4]を参照しながら、中村が唱えた近代的「良妻」像と近世における理想的妻像との違いを明らかにしたい。

3　近世女性像からの連続と変容

3.1 「妻」の役割と「母」の役割の連続性と変容

ここでは、中村の「良妻賢母」思想が当時どれほど新しいものであったかを理解するために、近世の女性が結婚後に夫の家でどのような役割を期待されていたかを確かめる。近世庶民層[5]の女性を研究した伊藤麻佑子によれば、女性の活動は「家」の内外によって大きく二つに分類することができる。比較的裕福な「家」の内部では、掃除、衣類管理、料理といった家事労働に加え、来客への応対、家業への関与、家業家内奉公人の管理があり、さらに子供の出産と養育といった「母」の役割が加えられる。一方、「家」の外部での活動は、冠婚葬祭時の贈答儀礼や寺社参詣・物見遊山等の外出、三味線・俳句等の教養文化的活動があったとされる（伊藤麻佑子 2012:111）。江戸時代の庶民[6]に対する善事褒賞[7]を研究した妻鹿淳子によると、1800年代から「家内和睦」による褒賞が増え始め、1810年代には急増している。これは家の中心となる家長に強い権威を持たせる必要性が強まり、そこに、必要不可欠な徳目として「孝」が強調されてきたためであるとされる。そして、近世後期の「孝」の徳目に対する褒賞では、その実践的行為としての介護に焦点が当てられている。また、妻として褒賞を受けた事例では、実父母、養父母の介護が23.8%、舅姑、夫の介護が76.3%であるとされる（妻鹿淳子 2008:177–222）。このように近世の後期までに、女性が「孝」の徳目を備えることが重要だと考えられるようになり、特に舅姑、夫の介護がとりわけ高く褒賞されるようになった。

このような近世の女性像を近代のものと比べると、「母」の役割がほとんど強調されず、特に家庭で子供を教育するという役割が全くないことに気づく。このように、子供の家庭教育を担うという女性の役割は、明治以降において構築されたと考えられよう。

3.2 「妻」・「嫁」・「妾」

「良妻賢母」思想を考察する前に、まず私生活における女性を指す言葉について検討しておきたい。そのような語には「妻」・「嫁」・「妾」がある。

「妻」という言葉は非常に近代的なイメージを持つ。それに対して、「嫁」という言葉は近代以前から使われてきたのは間違いない。「妻」を近代的な言葉とすると、なぜ「嫁」という言葉の上にそれが加えられ、日常的に使われるようになったのだろうか。この疑問点を検討する前に、まず「妻」と「嫁」の辞書上の意味を確認しておきたい。

「嫁」という言葉は『日本国語大辞典』第二版（2001）によると、婚姻によって、家族内部で呼ぶ称とある。ここではその複数の意味のうち、特に重要な二つの意味を取り上げたい。それは①息子と結婚してその家の一員となった息子の妻；②妻、妻女、女房、また、結婚した当座の女子の称の二つである。

①の用法はより普遍的に用いられていると考えられる。ここから「嫁」という言い方は本人や夫によって用いられるだけではなく、家族全体における位置づけを示す語として用いられてきたことは間違いない。「嫁」を「妻」としてのみ指すのではなく、大きな家族の一員であることがより強調される。従って、「嫁」という称は、核家族内部の女性には相応しくないと言えよう。

「妻」という言葉は『日本国語大辞典』第二版（2001）によると、婚姻によって、家族内部で呼ぶ称としては、以下の用法がある。

①婦、恋人が互いに相手を呼ぶ称。②婚姻関係にある女性。特に法律では、婚姻届の出される正式の女性だけをさし、内縁関係にある女性は含まれない。民法（明治31年）（1898）七八八条には「妻は婚姻により夫の家に入る」という二つが示される。

このように①と②の解釈はいずれも舅や姑の存在を特に念頭に置いていないことがわかる。しかも、①から、「ツマ」という言葉は元々夫婦、恋人がお互いに相手のことを呼ぶ称であったものが、後の時代になって、男性にとってその配偶者への呼称となったことがわかる。ただ、①は近代以降の実生活

では用いられなないため、ここでは②を検討したい。②では、結婚関係が特に強調され、さらに民法の規定からも明らかなように、結婚した後、女性は夫の家に入ることが明示される。つまり、「妻」は夫の立場に基づいて存在する言葉だと言えよう。すなわち、「正妻」のことである。民法の成立時期を考えると、婚姻関係にある女性を呼ぶ称として「妻」が法的に定められたのは、近代に入ってからだと言える。中村の女子像に関する資料を見る限り、「嫁」という語は見当たらず、主に「婦人」または「妻」が用いられている。これはなぜだろうか。

近世までの女性の間では、家庭内で特に舅と姑に対して「孝」を行う役割が重要だった。先述したように近世の後期までは、女性が「孝」の徳目を備えることが重要だと考えられ、特に「嫁」として舅姑、夫の介護がとりわけ高く褒賞されていた。すなわち、近世までは家の中において「孝」を中心とする「嫁」の役割が非常に強調されていたということである。

近代に入ると、国家のための人材育成が急務となり、それは「孝」の徳目よりも重視されるところとなる。「嫁」という呼び方が「妻」に変更されるのは、夫を支え、子供を教育することで家よりむしろ国家に奉仕せよという新たな役割を女性たちに認識させる要素もあったのではないだろうか。そのため、「妻」という言葉は「嫁」よりも、より近代国家に好まれたと考えられよう。

また別の理由としては、近代になると、都市では「核家族」の増加に伴い大きな「家」が極めて小さくなり、夫婦と子供のみで構成されるようになってくる。このような小さな「家」の中の女性の役割は夫と子供へしか向かなくなるため、「妻」という言葉は「嫁」よりも既婚女性に相応しくなったと考えられる。

この他には「妾」が近世以前から存在していたが、近代になると「廃妾」論が盛んになる。「女性解放」論が『明六雑誌』に掲載されたのをきっかけに「廃妾」論が諸々の新聞に登場するにともない、広く展開された（金津日出美 2002：255-256）。金津日出美によれば、森有礼は家産継承の装置としての「妾」を「血統」と「愛情」の両面から否定した（金津日出美 2002：260）。中村自身も「善良になる母を造る説」という著作で「親愛の情ある婦人は、その夫をして福祉、安楽を享けし、邦国のために有用なる事業を成しむることなり」と述べている。金津によると、中村は「愛情」によって結ばれる「夫

―妻」関係と「情欲」が媒介する「夫―妾」関係とに分離させ、後者を攻撃し、否定すると言った論法を取っているという（金津日出美 2002：258）。

中村自身が「廃妾」論の論者として、しかも、中村はロンドンという近代化した地域で、自ら子女を教育出来るだけの知識と教養を身につけていたイギリス女性を見て、日本の婦人が今のままでは日本が外国と競争できないと痛感した（山川 1972［1956］：30-31）。当時のロンドンでは核家族化が進んでいたと思われ、彼の目に映ったイギリス女性は、日本の「嫁」とは異なる「妻」であったと考えられる。このようなイギリス女性に感心する中村が、「嫁」という語を使わなかったことは理解できよう。また、中村が目指す「親愛の情ある婦人」と「善良なる母」には、それぞれ妻としての役割と母親としての役割が強調されており、これらは共に核家族内部に置かれた地位であったと考えられる。

以上のように、近代に入ってからの核家族の出現、増加及び女性が「良妻賢母」として近代国家への協力を要求されるという状況の中で、また中村自身が「廃妾」論者であったため、彼の理想的な女性像としての「妻」という語が「嫁」よりも相応しいものだったのである。

4　中村における「良妻」像

中村正直は、福沢諭吉や森有礼と並び称される明治の啓蒙思想家の一人である。1832年に下級武士の長男として江戸麻布に生まれた。17歳のときに昌平黌の寄宿寮に入学し、31歳にして儒官に列せられた。それにもかかわらず、中村は1847年、16歳の年、桂川国興についてひそかに蘭学を学んでいる。そして1855年23歳から英語を自習したりした。このように普段から洋学と接触する中村は1866年4月に徳川幕府の留学生政策[8]の下で行われた遣英留学募集に応じ、10月にそれまで教鞭を執っていた昌平黌を離れ、12名の留学生を率いる取締役としてイギリスに向かい、約二年間の在外生活を送っている。このように留学を果たした中村は、その後1867年12月9日の江戸幕府の大政奉還により、やむを得ず帰国した。

滞英中の中村が目の当たりにした人間像の一つに、「善良なる母」という女性像があったのである（陳妊湲 2007：65）。そして、帰朝後の1875年に中村は『明六雑誌』に「善良なる母を造る説」を掲載し、母の役割の重要性を説いた。しかし一方、先行研究の章で言及したように、中村の考える妻の役

割については詳しい研究がほとんどない。それにもかかわらず、「善良なる母を造る説」という一文の中で、中村はまず以下のように男女は同じ教養を持つべきと主張している。

> 男女の教養は同等なるべし、二種あるべからず……宜しく男子、婦人ともにみな一様なる修養を受しめ、それをして同等に進歩をなさしむべし。純清なる婦人は純清なる男性にともなわざるべからず。けだし善徳の律法は男子、婦人の差別なく、共に遵用すべきはもちろんなり。善徳多くある中に、そのもっとも主要なるは愛の徳なり（中村正直［1875］2009：126）。

このように中村は「男女の修養は同等」であるべきで、それによって男女は同じように進歩するのだから、「善徳の律法」は男女の「差別なく」「遵用すべき」であると強調した。中村は「善徳」の中でもっとも重要なのは「愛の徳」だと考えた[9]。中村は詩人ブラウニングを引用し、彼が重きを置く二つの徳目、すなわち愛と知識とを結びつけようと試みる。「真正の愛は知識を畀う、と。試みに普天下の人を見よ。天賦の才智もっとも多き人は真実の愛情最も深き人なり。愛の深き人は智の深き人なりというも可なり」（中村正直［1875］2009：126-127）。つまり、愛情は知識と結びつくのである。この引用からも、女性は教育を受けるべきだと中村は考えていたのではないだろうか。そして、女性は教育を受けるべきであるべきという発想は、「女子は才能がないのが徳である」という伝統的・儒教的な観点とはきわめて異なる。この発想も、イギリスの知識ある女性を見て生み出されたに違いないであろう。

愛情は女子教育と結びつくと考えた中村は、夫のためだけではなくさらに国家にも貢献すると愛情の重要性を説いた。彼は、婦人は「親愛」の情があれば、「その夫をして福祉、安楽を享しめ、邦国のために有用なる事業を成しむることなり」（中村正直［1875］2009：127）と述べる。愛の徳ある女性は自身の夫に「福祉」と「安楽」を与え、ひいては国家へ貢献する。このように、「愛情」によって結ばれる「夫―妻」関係を主張する中村は国家の視点から妻としての深い愛情の重要性を強調している。

「良妻」が持つべき具体的な資質について、中村は英国詩人ボルンスを引用して以下のように説いている。

> 好性情すなわち親愛四分、善き意見二分、巧智一分、美麗（顔色・眉目美好、容貌嫺雅等）一分、以上十分の八分なり。引き残りて十分の二あり。その中に、その妻の産業及びその交遊及び尋常より良き教育、才芸等なり。

これは人々各々その意にしたがいこれを分つべし。ただしここに注意すべきものあり。このもろもろの小部分は零数を持って分つべし。このうち何の一つにても全数を取るに足るものあらずと（中村正直［1875］2009:128）。

ここに見られるように、良妻の一番大事な資質は「親愛」である。これに続くのが「善き意見」と「巧智」である。このような資質は、主に夫や家庭の補助になるものと考えられよう。ところで「巧智」と同じ比率で語られるのが「美麗」である。十分の一とはいえ、中村が容姿にまで言及するのは興味深い。中村は、「親愛あるものは必ず和気あり。和気あるものは必ず愉色あり、愉色あるものは必ず婉容ありといえるが如く、諸善したがいて生じ、これよりして才智も生じ、大事も成し得らるべきなり」（中村正直［1875］2009:129）とも述べているので、「婉容」すなわち容姿が「親愛」と結びつくと考えていることがわかる。さらに中村は「真正の愛は知識」（中村正直［1875］2009：126-127）であるとも説いており、彼の主張する最も重要な資質である「親愛」も、女子教育と結びつくと考えていたといえるであろう。

一方、中村の著作には、男性に育児や家事を求めるものは見つけられなかった。このように、育児や教育など家庭における役割について、女性には多大な要求がされる一方、男性にはそれが全くないことも中村の言説の特徴である。また、中村は女性に「孝」という徳目を強調しなかった。これは近世妻像との大きな違いであり、舅姑に奉仕することが求められないのは、中村の近代的妻論の特徴と指摘できよう。

中村はさらに、「産業」、「交遊」などを「妻」の役割として期待しているが、これが具体的に何を示すのかは不明である。小川によると、中村は男子に国事を任し、婦人に家事を任す（小川澄江 2004：323）とも主張しているため、女性の産業従事を重視していたとは考えられない。本論文では、女性は男性のように社会進出すべきだという発想は中村になかったという理解にとどめておきたい。中村は「同権か不同権かそれはさておき、男女の教養は同等なるべし」（中村正直［1875］2009：126）と述べているように、男女の「教養平等」を主張するものの、男女同権は明言していない。

このような妻の役割に関する中村の主張は、どのように形成されたのだろうか。興味深いことに、先述の「女範」には、女性は結婚後、后徳・孝行・貞烈・忠義・慈愛・秉禮・智慧・勤儉・才徳といった資質を備えること、と

述べられている（王相 1893:3-17）。「后徳」は「古を稽むに興王之君は必ず賢明之后有り」（王相 1893:3）と説明されていることから、これは夫を補佐することが期待されていると理解できる。「忠義」については、「率土、王臣非ること莫し。豈閨中遂に忠義無しと謂わん……是れ皆女烈之諍諍……忠肝義膽以て百世を風し、而て綱常」（王相 1893：8-10）と述べられていることから、女性は男性と同じように国君に忠義を持ち、国家に貢献すべきであると考えられていることが分かる。「慈愛」は、「是れ皆な仁慈之懿を秉り、博愛之風を敦し、和氣に於いて家庭に萃まり、德教に於いて邦國を化する者也」（王相 1893：11）と説明されており、ここから女性が「慈愛」を持てば、家庭は和やかになり、ひいては国まで感化されると理解できる。「智慧」は、「家に智慧之婦有り、夫子之失を匡救」（王相 1893：12）するとされており、それによって夫を補佐することが重視されている。また、「言く女子、書を知り禮に達し、其の賢此の如し」（王相 1893：17）という一文もあり、女子は学問を持ち、礼に達するべきであるとも説かれている。このように女子は教育を受け、才智を持って夫を補佐することによって、最終的に国家に貢献できるという発想は、中村の「良妻」論と大きく重なっている。換言すれば、国家に貢献する女性の役割は、既に「女範」で主張されていた。ここまで見てきたように中村のこのような発想は、「女範」などに描かれる近世的女性像と似ていることが確認できた。ただ、中村の女子の深い愛情によって国家に貢献する主張に対して、「女範」では、女子は国君に忠義を持つことを通して国家に貢献すべきというように、国家への貢献に至る妻の役割や資質において、中村は「女範」と異なると指摘できよう。また、「女範」では、中村が主張したほど男子と同等の教養が女性に期待されおらず、従って女子教育の重要性も強調されていない。この点は、恐らく中村がイギリス留学経験から得た発想であっただろう。

また、関口礼子は中村の「良妻賢母」思想の意図が「母」にあり、「良妻」は単に「賢母」に付隋していたにすぎなかったと指摘した（関口礼子 1978:85）。「人民をして善き状態、風俗に変じ開明の域に進ましめんには、善き母を得ざるべからず、絶好の母を得れば絶好の子を得べく、後来吾輩の雲仍にいたらば日本は絶好の国となるべく」（中村正直［1875］2009：125）というように、中村の「良妻賢母」思想は確かに主に女性に母の役割を通して「開明」の日本の建設を説いた。しかし、上に述べたように、中村は妻の役割に

ついても周到な考察を行っている。中村は、妻はよく夫を補佐できるように男子と同様の教養を持つべきであり、それゆえ女子教育が必要であると主張する。さらに中村の主張する妻の役割は単に夫を補佐することに止まらず、夫を通して国家に貢献することとされた。こうしたことから、中村の「良妻」論は「賢母」論の付隋に過ぎないとは言い切れない。

5 おわりに

本論は、「良妻賢母」思想の提案者としてよく取り上げられた中村正直が主張した「良妻」として備えるべき資質及び果たすべき役割を検討し、彼における「良妻」像を明らかにした。

まず、中村が「良妻」の重要な資質として挙げたのは「好性情」、すなわち親愛の情であった。これに続くのが、夫を支えるための「善き意見」と「巧智」であった。中村はこうした女性の資質は教育を受けることで高めることができると考え、女子教育の必要性を訴えた。もっとも中村は、女子はそのようにして夫の補佐が出来るのが好ましいと考えていた。中村は、女性は家事を担当すべきだと考え、女性を社会進出させる発想はなかった。中村の「良妻」論は、彼のイギリス留学経験を経て生み出されたものであるが、夫を補佐することで国家に貢献するという「妻役割」には、西洋の影響よりも「女範」との共通性が強い。しかし、中村が目指す「親愛の情ある婦人」と「善良なる母」には、それぞれ妻としての役割と母としての役割が強調されており、これらは共に近代に入ってから増えてきた核家族内部に置かれた地位であったと考えられる。したがって、中村が女性に「孝」という徳目–特に舅姑の介護–を要求せずに、愛情によって結ばれた夫妻関係を主張することは、近世までの舅姑と同居する大きい家族にいる「良妻」の伝統と大きく異なるといえる。

注

[1] 中村正直（1832 ～ 1891）明治時代の日本の啓蒙思想家、教育者、文学博士。英学塾・同人社の創立者で、東京女子師範学校摂理、東京大学文学部教授、女子高等師範学校長を歴任した。号は敬宇。

[2] 例えば深谷昌志によると「言語上では、良妻賢母は『賢妻良母』という形で、すでに『明六雑誌』上に中村正直が使用している」と言い、その内実は彼が「ミルの「自由論」の紹介者であることからも明らかなように、文明社会を作るには賢い母、良い

妻が必要だと、男女共通教育の内容を含んだ」近代的かつ啓蒙的用語であったとしている（深谷昌志 1998［1966］:156）。また劉肖雲は、中村が『明六雑誌』で使った「善き母」という言葉が、「後に出現した良妻賢母の原形」であると指摘し、「ミルが書いた『自由の理』という本を翻訳するなかでは、『賢母良妻』という言葉を使った」と説明している（劉肖雲 2001：3-4）。中村正直は実際に「良妻賢母」、「賢母良妻」、「賢妻良母」などの言葉を用いたかどうかはさておき、中村はより早い時期から公に「良妻賢母」思想を打ち出したのは間違いない。

[3]「良妻賢母」という語は中村の著作の中で直接使用されたわけではない。本論文では、以下に示す彼の良妻賢母思想が表現されている場合に、それを指す語としてこれを用いる。

[4] 中村の蔵書（静嘉堂文庫所蔵）には、西坂衷の『校訂女四書』が残されている。また、中村は幕末に西坂衷が学んだ昌平黌に入学した。このことは中村が同書を読んだことを意味する（関口すみ子 2001：31-34）。

[5] 庶民とは、支配者身分である「武士」に対して、被支配者身分の「農工商」に当たる身分の総称とされている（伊藤麻佑子 2012：130）。

[6] ここの庶民とは、支配層に相対する被支配層であるというように同じ被支配租であるから、注（5）の伊藤における庶民の概念と同じであろう（妻鹿淳子 2008：6-7）。

[7] ここで対象にしている善事褒賞とは、岡山藩において藩政初期の段階から明治4年の廃藩置県までほぼ継続して残存する褒賞記録である。そして、妻鹿淳子はこれらの褒賞記録を題材として、岡山藩領域の庶民の生活実態を諸相を描く試みであった（妻鹿淳子 2008：6-7）。

[8] 1866年10月、徳川幕府は諸学研究を目的としてイギリスを留学地とする官費留学志願者を募集し、語学を中心に選考試験を経て、洋学者や洋医の子弟を中心とする派遣生12名を選抜した（原平三 1992）。

[9]『西洋品行論』に収められた「情死論」から、中村は男女の恋愛の情や自由恋愛、愛に基づく近代的夫婦観を持っていたことがわかる（小川澄江 2004：165）。

参考文献

伊藤麻佑子 2012「近世商家の妻役割――婚姻を中心に」『女性歴史文化研究所紀要』20（特集日本近世女性史）。

王相編（西坂衷翻刻）1893『女四書』巻四「女範」目黒十郎支店。

小川澄江 2004『中村正直の教育思想』私学研修福祉会平成15年度研修成果刊行費助成による刊行物。

金津日出美 2002「明治初年の「妾」論議の再検討――「近代一夫一妻制」論をめぐって」永原和子編『日本家族史論集5家族の諸像』吉川弘文館。

蔵澄祐子 2008「近代女子道徳教育の歴史――良妻賢母と女子特性論という二つの位相」『研究室紀要』34。

小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房。

関口すみ子 2001「『女四書』と近代日本」『季刊日本思想史』59（特集近代儒学の展開）。

関口礼子 1978「「賢母良妻」から「良妻賢母」へ——明治28年から31年の高等女学校論」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』5。

陳姃湲 2006『東アジアの賢妻良母論——創られた伝統』勁草書房。

中嶌邦 1981「日本教育史における女性」女性学研究会編『女性史をつくる』勁草書房。

中村正直［1875］2009「人民の性質を改造する」山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』下岩波書店。

早川紀代・李熒娘・江上幸子・加藤千香子 2007『東アジアの国民国家形成とジェンダー——女性像をめぐって』青木書店。

原平三 1992『幕末洋学史の研究』新人物往来社。

妻鹿淳子 2008『近世の家族と女性——善事褒賞の研究』清文堂出版株式会社。

中国語

李卓 2007「从“良妻贤母”到“贤妻良母”的不同命运——近代中日女子教育比较」『日本学论坛』1。